

## 【書評】 濱野靖一郎『天下の大勢』の政治思想史―頼山陽から丸山眞男への航跡―

田中 豊

世界はどこに向かって進んでいるのか。混迷の時代に生きる現代人にとっては切実な話題である。前途は不明だけれども、この進路に乗じないのは何と無く不安であり、ど

うも居心地が悪いような気にさせる。世の中がこのような流れで進んでいるならば、その「勢」に従うことは安心をもちたらずであろう。反対に、ひと度この「勢」から逸脱すれば、その人は非難の対象になりかねない。なぜなら、皆が搭ずる「バス」に乗り遅れないことが「天下の大勢」に従う正当な営為なのだから(「はじめに―バスの行く先」)。

第一章…丸山眞男の「追加」

第二章…頼山陽の「決断」

第三章…阿部正弘の「発明」

第四章…堀田正睦の「非常」

第五章…勝海舟の「憤懣」

第六章…木戸孝允の「涙」

第七章…徳富蘇峰の「将来」

第八章…原敬の「順応」

むすびに…時運ノ趨ク所

そもそも「大勢」「勢」という漢語は、日本でも古くから使用されてきた。ただし濱野靖一郎氏(以下、著者)によると、近世後期まで使用される「勢」、あるいは「天下の大勢」は、現在のような言説正当化を含蓄する言葉ではなかった。本書は、その転換をもたらした人物として頼山陽に特に着目し、山陽の「勢」の思想から「世界ノ大勢、亦我ニ利アラス」(「終戦の詔書」)までを対象に、「天下の大勢」がいかに正当化の言説となり得たのか、その形成過程を明

らかにする。本書の構成は、「はじめに」と「あとがき」を除き以下のとおりである。

なお、末尾の「人名索引」を瞥見すれば明らかのように、本書には多くの人物が登場する。それゆえ、各章題に載る人物が必ずしもそこの主人公ではないが、右記の目次にみられる人物を中心に本書の内容をまとめてみよう。

\* \* \*

第一章では、丸山眞男が日本思想の「古層」として提示した「つぎつぎなりゆくいきほひ」がはじめに取り上げられる。丸山によると、「なる」「つぐ」は『古事記』『日本書紀』に用例を認めることができるとはいえず、「いきほひ」については記紀神話に由来しない概念であった。そのうえで、「いきほひ」に含まれる「時間の経過」という概念が、漢語としての「勢」にも当てはまるといふ丸山の主張に、著者は「不適切な説明」であるという。むしろ、もともと「時間の経過」を含まなかった「勢」が、いかにして「天下の大勢」のような動的な意味合いに変化したのか、その変容過程こそ重要であり本書の問題意識であると著者は強調する。「天下の大勢」の来歴を探るのは難しいが、ここでは儒学の場合を確認してみよう。例えば朱熹は「天下大勢」を「現在の状況」と言い換え、「どういった状況に進むのが必然か」と、あくまでも現状認識の謂いで用いていた。近世日本においても朱子学者・新井白石『讀史余論』は、「天下の大勢」を朱熹と同様に、ある時期・範囲の状況を整理した静的な概念として用いていた。さらには一八世紀の中国を王朝ごとに分析し、清王朝による日本侵攻の可能性を示唆していた林子平『海国兵談』は、現在の太平に浮かれるのではなく将来に及ぶであろう危機に備える必

要性を説いていた。子平にとっての問題関心がいま何をすのかであったことから、『海国兵談』にみられる「時勢」にも動的な観念はみられなかった。以上のように、「世界の大勢」に乗らなければならないという「規範」を伴う「勢」観念は、この時点においてはまだ現れていなかったといえる。

第二章では、頼山陽の「勢」が主題とされる。前章で著者は「勢」に対する丸山眞男の見解を批判しつつも、「天下の大勢」に「運動量」<sup>モメンタム</sup>を加味した嚆矢として頼山陽を挙げる丸山の理解を評価する。例えば山陽は『通議』(「論勢」篇)で、「天下の分合・治乱・安危する所以のものは、勢なり」と述べていたように、山陽の用いる「勢」には動的な観念が含まれる。山陽を契機に、朱子学者が認識していた静的な概念から、動的で留まることのない「勢」として、その意味内容は大きく転換した。言い換えると「勢」に翻弄されつつも、主体的・能動的に「勢」の変化を捉え制御していくことが為政者に求められる営為であり、山陽にとっての「政治学」であった。また山陽は、「勢の天下におけるや、それ猶ほ水のごときか」と、「勢」を「水」に譬えている。「水」の流れを止めることはできないが、流れを誘導する治水の如く「勢」を制御し得るとの考えをそこから読み取ることができる。それでは、「勢」を制御するに

は具体的にどうすればよいのか。山陽によると「機」、すなわち「勢」が醸成される契機を見抜く視座を養えばよく、それが為政者に求められる資質でもあった。つまり「機」と「勢」とを的確に見透かし判断する能力を備えていることが、為政者の「権」の正統性、すなわち「君」の「君」たる所以を担保する。本来、秤を意味する「権」が重視される背景には、「理」を政治に持ち出し政治的課題に優先順位をつける朱子学に依拠した統治に対する山陽なりの批判が込められている。山陽は、「理」が現実の政治世界にア・プリオリに存することを前提とする朱子学の立場に与せず、様々なケースを想定し相対的に最善と思われるものを勘案して政策の是非を決定することに重きを置いていた。そして、その代表者として挙げられていたのが徳川家康であった。統治の正統性と神秘性を帯びた人物として家康が高く評価されていたことに鑑みれば、山陽を単に幕末における討幕の理論提供者として捉えるのは偏見であると著者は強く主張する。

第三章では、幕末開国期における山陽に対する眼差しや彼の著作の流布の有様を踏まえ、山陽の思想的後継者が現実の政治にいかに対処したのかが考察される。例えば幕臣・林鶴梁かくりやうは『日本政記』に寄せた序文で、山陽によって提唱された統治理論を実際に運用する為政者の不在に嘆

いていた。山陽の著作の注意深い読者であった鶴梁は、それゆえ山陽の弟子からも師のよき理解者とみなされていた。また、山陽の門人で『日本政記』の刊行にこぎつけた関藤藤陰は、師の思想に最も忠実な政治活動を展開した。たとえば、側近として侍っていた老中・阿部正弘を藤陰は、政治的決断能力が欠けた人物として手厳しく非難する。なぜなら正弘は、「勢」をコントロールすることができない決断力に乏しい指導者であり、山陽の政治理論に鑑みて為政者として相応しくないとためであった。もっとも、正弘は「君主」ではなくその補佐役であったとはいえ、適切な政治進言をしない以上、山陽の弟子からみれば優れた為政者とみなされなかった。一方、正弘と異なり、決断力もあり妥当な判断能力を有する者として評価されていたのが徳川斉昭であった。このように山陽の弟子において、水戸老公と正弘の為政者としての政治的資質はパラレルな関係として描かれるのであった。ただし正弘においても、外国との緊張関係が極度に高まった現状を「かなり厳しい」と把握しつつも、「氣運」に託して時の流れに身を任せる態度に警戒し、「天下の大勢」に対して主体的に行動することの意義は自覚されていた。たとえば、ペリー来航を機に諸藩から意見を諮り、それに基づく「衆議」(評議)による政治の正当化を試みていたのはその証左であった。つまり

正弘は、朱子学者のように「理」の遵守に拘泥することなく、政策決定に際して「時勢」に留意することにも重きを置いていた。それはまた、その後の政治空間において「時勢」に応じた政策が実施されなければならないという態度の定着に繋がる。

第四章に登場する堀田正睦は、正弘のように山陽の弟子を配下に持たなかった。とはいえ、正睦が重用していた川路聖謨が山陽の著作の愛読者であったことを思えば、彼もまた「天下の大勢」論と無縁ではなかった。正睦は、欧米と日本とを比較分析し、仮に戦争が起きた場合、日本には「勝算」がないことに言及していた。つまり外国との戦争に陥った場合、国内の治安悪化や諸大名の疲弊を強調するのではなく、日本に勝ち目がなことを明確に認めるのであった。そのため、国益のために開国し、外国との交流を通じて利益になる西洋の技術を積極的に取り入れることが、重要な政治的課題であった。徒に「理」で政治を捉え、事の利害や「世界の時勢」を軽視するならば「国事」を誤るとの危機感を抱いていた正睦であったが、御公儀が瓦解に向かうという目下の「日本の大勢」を統御することはできなかつた。

第五章では、大政奉還の後に勝海舟が閣老に提出した「憤言一書」に注目される。「憤言一書」は、「天下の大権」

が「一正」に帰すことの意義を説く。しかし、いまの「天下」は「私」に趨<sup>ほし</sup>る輩が跋扈し、今後もどうなるか分からない状態にある。加えて、事態の打開を図るために「俊傑」のいない大名を集めたとしても、かえって逆効果でしかない。そのうえで、この度の瓦解は御公儀の諸役人が「天下の大勢」を理解できなかったことに原因があるとみなし、「天下の大勢」を踏まえることができずに国事を誤ったことに対して海舟は批判していた。このような状況に至った所以は御公儀の役人のあり方が正しくなかったためであり、今後は「私心を去て、公平の亮察を仰ぐ」べきだと海舟は強調する。そのうえで著者は、こうした態度が山陽の言いぶりに類似すると指摘する。要するに海舟の用いる「天下の勢」は、朱熹や白石によって用いられていた「現状」ではなく、人間によって操作されるべき流動的な意味合いが含まれていた。

第六章では、倒幕側の山陽思想の受容が扱われる。ここで注目されるのは木戸孝允である。木戸は「天下の大勢」を「千変万化」し「正」に帰する動的なものとして、端的に言えば山陽の「勢」の如く認識していた。この際に木戸は、多くの人々が「宇内の大勢」を理解することができないという、ペスミスティックな「民」観に立脚していた。それは、木戸も作成に携わった五箇条の御誓文の一節「広

ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スヘシ」にみられる「公論」に對する觀念にも反映されている。木戸にとつての「公論」は、「大義名分」と「条理」を兼ね備えたものであり、誰もがわかる容易な概念ではなかった。大半の人々は「百年の利害」を察し力を尽くすことができないため、「公論の何事たる、宇内の大勢の何事たる」を理解し得ない。それゆえ知性を備えた人物が党派に拘泥することなく、公平な視点で物事を観察、把握する態度が肝要であった。それは、「民」や「中人」ではない「大義名分を基とし、条理」を理解し得る者、すなわち木戸自身の役割であるという自負の表明でもあった。そして、木戸が自覚していた「宇内の大勢」とは「御一新の御一新たる所以」、すなわち「皇国」を維持していくことに他ならなかった。「今日の目的」に向かつていく「大勢」を察知し、制御することに重きを置いていた木戸にとつて、版籍奉還をはじめとする政治政策は「時勢」と「公議」の集約の結実、すなわち状況を踏まえ広く妥当な意見が集められた結果であった。木戸の「公議」をある種の「理」とするならば、以後の明治日本は「勢」と「理」が等価なものとして進んでいくことになるであろう。

第七章は大きく二つの部門から構成される。前半では、自由民権運動とそれをめぐる思想状況が扱われる。御公儀

と呼ばれた徳川政権は瓦解した。明治新政府においては、この度の「御一新」を崩壊させない強固な体制にするような方策の模索が今後の課題であった。同時にそれは、眼前の不平士族による不満という「勢」に、いかに対処するかという問題も意味していた。そこに征韓論があり、その失敗のはけ口の一面に自由民権運動があった。この運動のきっかけである「民撰議院設立の建白書」も、著者によると「時勢」の解釈如何に関わる。つまり、この建白書の論点は国会開設の可否自体ではなく、「いつ開設するのか」「今」か「先」か、すなわち「時勢」にあった。有司専制に對する批判、人民を進歩させる手段、そして租税に由来する権利の三つによって基礎づけられていた同建白書の内容は、まさしく「我国今日の勢」であった。これに對して、「方今の勢」として「政権の帰するところ」が有司にあると喝破した西周による反駁が有名である。西は、「議院」自体を否定しないが、「時に徴しこれを人民開化の度に質して」みると、民撰議院をただちに設立するのは時期尚早であると批判していた(「駁旧相公議一題」)。国会の開設如何に關して、「人民を進歩させる手段」なのか、それとも「人民開化」の先に開設されるべきなのかについては論争の焦点となった。とはいえ、国会開設が「天下の大勢」であるとの認識は、いずれの陣営においても共有され

ていた。本章の後半では、徳富蘇峰が取り上げられる。蘇峰の「大勢」は、当時絶大な影響力を及ぼしていた社会進化論と融合したところに特徴があった。蘇峰によると、「学問及教育の世界」における「今日の大勢」を「泰西的の学問世界」に一変させることが急務であった。「第十九世紀平民世界の大勢」により、「明治の青年」が「泰西自由の空気を吸って、「泰西自活的人」となり、「維新第一の革命」に次ぐ「知識世界第二革命」を達成しなければならぬ。将来の「日本の大勢」の行く末は「世界の境遇」たる「生産国」と「平民社会」に向かって変化していかなければならず、このような「第二革命」が成就できないならば、それは「時勢の罪」ではなく、進むべき「大勢」に乗じ得なかった「吾人」の責任となる。「世界」と「日本」の二つに「大勢」を分割し、「日本の大勢」を「世界」に沿うように主体的に操作することが、蘇峰における「大勢」への対応であった。

第八章では、明治から大正にかけての「大勢」論が大きく三つの部門に分けられ考察される。第一に、為政者や権力から距離をとっていた人々における「天下の大勢」について。例えば夏目漱石の場合、「日本の大勢」の前途を洞察するだけに留まらず、「理想」とする「社会」に合致するような日本の文学作品のあり方を模索していた。つまり、

高所から「大勢」を操作するよりも、実際に「大勢」のなかに身を置いたうえで「自己本位」の確立が切実な課題として自覚されていた。あるいは、新しく進んでいくことそれ自体が「進化」としての「天下の大勢」であると認識していた幸徳秋水は、「勢」の限極として「資本家制度」を捉え、その衰えから「新果」としての「社会主義」が実現すると『社会主義神髓』で期待していた。第二に、吉野作造について。著者はここで、吉野の「大勢」「時勢」を「自己の議論に説得力をあたえるための修辞」とみる飯田泰三の研究を紹介したうえで、吉野の著作「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」で「世界の大勢」が、正当化の言説として使用されていたことを理由に飯田の主張を批判する。すなわち、「立憲政治を行う」ことは「実に世界の大勢にして今更反抗」できないという吉野の言を踏まえるならば、「大勢」は飯田のいう「修辞」ではなく、「真理」の謂いとして捉えなければならない。第三に山陽の愛読者でもあった原敬について。彼の論説「大勢を知るは官民の急務」では、政府や為政者が「勢」の赴くところを察知して、これを「予め処理」することの重要性を説いていた。既に勅諭が、「日本の大勢」の「赴く所」として国会の開設を定めたのならば、「大勢」そのものを動かすのではなく、その流れの中で自分たちの行為をいかに位置付

けるのが問題とされる。つまり、動かしようのない運命のような「大勢」に、いかに順応していくのが原にとつての課題であった。

本書の論点は、頼山陽により息を吹き込まれた「大勢」が「流されていく」言葉として、すなわち主体性が薄れていくその変容過程を検討することであった。「むすびに」では、その究極形態として「終戦の詔書」(玉音放送)が扱われる。詔書は、米国との「戦局」が「好転」しなかった要因を「世界ノ大勢、亦我ニ利アラス」に求めている。足掛け四年の米国との戦争の総括としてまとめられたこの一言に注意を払う著者は、他にも「朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」のように、「時運」に身を委ねることを説く表現がみられることにも着目する。ここにあらわれる「万世ノ為ニ太平ヲ開」くには典拠があり、もとは北宋の儒者・張横渠が説く、科挙に及第し士大夫たらんとする者のエートスであった。しかしこれを引く詔書の場合は、張横渠のいう「心を立て」、「道を立て」、「絶学を継ぐ態度はみられず」、「太平」のためにただ「時運ノ趨ク所」に堪えることのみを求める主体性の契機が欠如した内容であった。

\* \* \*

「天下の大勢」を主題とした本書は、頼山陽の思想が幕

末・近現代においても依然として絶大な影響力を及ぼしていたことを明らかにした。しかし、本書の主旋律をなす論点が、同時に課題に繋がる。すなわち、山陽の「勢」観念の波及効果に注目し過ぎるがゆえに、本書に登場する人物の個々の思想営為は凡そ山陽に帰着し、彼らの思想の特徴が捨象されるきらいがあった。とりわけ、近世後期以降の山陽思想の影響力を強調し過ぎるあまり、登場人物の思想が時に強引に山陽の「勢」観念と結びつき、個々の独自性を後退させる場面が往々にしてみられた。つまり、何世代もあとの近代に生きた人物が山陽の愛読者であったとの理由で山陽とただちに結びつけることに疑義なしとはいえず、若干の留保があつてもよかつた。一例を挙げるならば、第八章の幸徳秋水『社会主義神髄』に対する考察において、著者は同書の「革命」に関する記述が『通義』論勢・論水利を下敷きにしたような表現であると述べていたが(三一七頁)、秋水が山陽を参照していたという明確な根拠はここでは示されていなかった。「進化」という「理」を内包していたがゆえに、「天下の大勢」が正しいと認識する秋水において、山陽よりも一層注目されるべきは、秋水に多大な影響を与えた師・中江兆民であろう(ちなみに兆民も山陽の愛読者であった)。特に『三酔人経綸問答』からの影響を抜きに、秋水の「勢」論を語ることはできな

い。「世界の大勢」を所与として捉え、それへの順応を説く傾向の強かった近代日本に一石を投じた兆民は、新しい「世界の大勢」を自ら積極的に作るうとする姿勢を、三酔人の一人である「洋学紳士」に投影させ語らせていた。そして、こうした「洋学紳士」の気概が秋水をはじめ二十世紀初頭の社会主義者にも受け継がれていくことは、既に指摘されている<sup>二</sup>。「社会の組織状態の如何を察し、進化の大勢を利導して、以て平和の革命を成さん」という「革命家」、ないしは「社会党」の主体的営為は、ベクトルこそ異にすれども、「進化の理」「進化神の行路」を重んじていると「南海先生」に評された「洋学紳士」の姿を彷彿とさせる。もつとも、山陽から兆民へ、そして兆民から秋水に「大勢」の観念が継承されている可能性があるとはいえ、いずれにせよその過程においても兆民の存在は重要な位置を占めるのではないだろうか。

本書の意義は、「天下の大勢」が単なる山陽独自の思想に留まらないことを明示した点にある。山陽をはじめ多くの思想家との真摯な対話を通じて抉出された「天下の大勢」が、思想史のみならず現在の日本の政治社会に孕む問題をも照射し、分析するツールとして有効であることを示すことに成功している。著者の努力成果は、日本政治思想史や歴史学に留まらず、広く学界に寄与する役割を果たすに違

いない。現在、我々が―知らず識らずのうちに―乗っている「バス」とは一体何なのか。本書を手掛かりに、現代の政治社会における「天下の大勢」を眺めることで学び得ることは多岐にわたるであろう。

#### 注

<sup>一</sup> 著者の前著『頼山陽の思想』（東京大学出版会、二〇一四年）での重要なテーマは、その副題にもある通り、山陽の思想から「日本における政治学の誕生」を明らかにすることであつた。

<sup>二</sup> 植手通有「兆民における民権と国権」（木下順二・江藤文夫編『中江兆民の世界』『三酔人経綸問答』を読む』筑摩書房、一九七七年）、八二頁。

※濱野靖一郎『「天下の大勢」の政治思想史―頼山陽から

丸山眞男への航跡―』、筑摩書房、二〇二二年六月

（関西学院大学）